

# やっかいな竹 肥料や紙に



富山市ファミリーパーク高台の「みはらし広場」に隣り合う山林。散策路の脇には竹が生い茂り、倒れかけの竹で少し先も見通せないほど真っ暗だ。その中に、木のない空間がぼっかりとある。

「昨年まで500本ほどの竹が生えていました」

「里山整備ボランティア」きんたろう倶楽部の松田秀明事務局長(52)が説明する。確かに、数十本ほどに伸びた竹がところどころに顔を出す。

「竹は成長が早い。継続して5年間くらい切り続けると、根負けして出てこなくなるらしいんです」。かなりやっかいな相手のようだ。

県内では竹林の拡大、放置が深刻な問題になっている。

1975年に572畝だった竹林面積は、30年あまりで約2倍になった。手入れしない竹林は他の植物の成長を妨げる。鳥や昆虫が生きる場所もなくし、根が浅いので、大雨で地盤がゆるむと竹林ごと崩れることもあるという。

きんたろう倶楽部は竹を切ったり加工したりして、荒れた竹林の整備に取り組んでいる。

## ボランティアや企業、活用図る

A. 8. 23

2006年に設立し、今年会員は700人以上だ。500本の竹はその後、半年かけて肥料になった。キノコ栽培に使った菌床をトラック1台分100円で買い、チップにした竹と混ぜ合わせ。最初の2年間は、作り方が分からず失敗。昨年初めて研究機関から合格点が出た。今年、呉羽丘陵のふもとにある富山総合支援学校の生徒や保護者らが伐採に参加した。肥料は学校にも贈りたいと松田さんは考えている。

「呉羽の竹からできた肥料で咲いた花を子どもたちに楽しんでもらいたいです」

富山でも切った竹を無料で回収するトラックを走らせている。だが、竹の量が圧倒的に多い鹿兒島に比べて意識もまだ低く、月に集まるのは20トほど。「このままだと里山が全部竹林になってしまう」。そんな悲鳴も聞こえてくる。

(中林加南子)



荒れた竹林拡大 30年で倍増

500本の竹があった場所を松田さんたちは「きんたろうの森」と名付け、ここを起点に散策路を作り始めた。休憩小屋もできる予定だ。富山市